

高学年・専攻科における英作文指導の必要性とそのあり方

—秋田高専における現状をふまえて—

桑 本 裕 二

The Necessity and the Ideal Way of Teaching English Composition to Junior/senior-Year, and Advanced Course Students: A Case Study at Akita National College of Technology

Yuji KUWAMOTO

(2005年11月30日受理)

This paper reports a case study of teaching English composition in junior/senior year (4th/5th grade) and advanced course at Akita National College of Technology. In our college we have been engaged in several studies on teaching English effectively. For lower-year students, we have focused on teaching elementary grammar and listening comprehension, and they have remarkably contributed to the educational program for the TOEIC Test and the STEP (The Society for Testing English Proficiency, inc.) Test. But the results of the tests show the lack of writing skill of the students.

As to junior/senior year and advanced course students, we have never taken any specific measures to compensate the lack of writing skill. Therefore I introduced English composition to English classes of junior year and advanced course. The experience and practice of English composition are expected to help students master the skill of writing papers in English as the important practical knowledge and instantly get higher score at the TOEIC test and the STEP test overcoming the lack of writing skill as well as reading skill.

1. はじめに

卒業後の学生の就職，大学編入学に際して，英語の運用能力の向上がさらに要求されるようになった現在，本校の英語教育においても様々な対応策の検討を余儀なくされている。これまで，本校英語科においては，主に英検¹（桑本・菅原・海上 2005）と TOEIC²（菅原 2005）の受験の奨励と，合格，高得点取得へ向けて，授業への導入も含めて実践してきた。

¹ 文部科学省認定実用英語技能検定試験。1～5級，準1，準2級の7つの級がある。本校においては2，準2，3級を中心に受験指導を行っている。

² Test of English for International Communication の略称で，英語によるコミュニケーション能力を評価する世界共通のテスト。世界約60ヶ国で実施されている。本校においては2001年度より3年生を中心にIPテストを導入し，受験指導を行っている。

英検に関しては，1年次で3級，2年次で準2級の全員取得を目標にしてきた³。これは，3年次に行っている TOEIC IP テスト全員受験と，それを目標とした3年次の授業での TOEIC テストの問題演習に対して，前年までに基礎力を備えるという意味合いを持つものである。

TOEIC テストに関しては，2001年度より，1～2月頃に主に3年次学生を対象とした TOEIC IP テストを実施し，現在に至っている。これは，卒業後の就職，進学に際して，英語能力の客観的評価が TOEIC テストのスコアに求められるという社会的要求に応えるため，学生に具体的な受験の機会を与え，スコアの向上を促すものである。3年次学生には当該年度必修科目の英語の授業の内容を TOEIC

³ 桑本・菅原・海上（2005）で報告したとおり，本校における1年次の3級取得は90%前後，2年次の準2級取得は，徐々に低下してきたが，2004年度で43.5%という実績である。

テスト対策に当てて受験に臨み⁴、それ以降の学年の学生（専攻科学生も含む）に対しても就職，進学への対応を見込んで受験を奨励してきている。

高等専門学校就学5年間の英語の教育課程の中で、上記2種類の英語能力認定試験に対して、本校ではこれまで、主に低学年に注目してカリキュラムを検討し、対応してきたといえる。菅原（2005：63）は、本校のTOEICテストへの取り組みに対しては、低学年における英語の基礎力強化の重要性を主張し、今後の対応も含めて、低学年学生に対する教育実践のための素地はできあがったと見なしてよい。

一方、4、5年次の高学年および専攻科の学生に対しては、目標となる就職，進学が目前に控えているにもかかわらず、これまでのところ、カリキュラム上、英語の基礎力、運用能力などの向上に関して、具体的な対応策はとられてこなかった。

高学年・専攻科の学生にとってのTOEIC・英検受験に対する関心は年を追って高まっている。しかしながら、それらの試験に対する結果は、現在のところ決して芳しいものではない。ここ1、2年の高学年・専攻科学生の、TOEICテストおよび英検2級の成果を分析すると、読解力の不足が代表的な問題点として挙げられる。

筆者は、2003年度以来、高学年クラス、専攻科クラスの英語科目を継続して担当するにあたって、読解力を重点的に養成すべく、長文読解を中心に授業を実践してきた。一般に、語学教育において基本となる「読む」「書く」「聞く」「話す」の能力のうち、通常の英語の授業では「読む」能力の養成に重点が置かれ、1年次開講の「英語LL演習」（通年2単位）や2年次開講の「英語会話」（通年2単位）では、実用性を伴った「聞く」「話す」の能力の養成を行う機会を持つ。「書く」能力の養成に関しては、現在の本校の英語教育の中では最も軽視されてきたと言わざるを得ない。筆者はこの点に注目し、読解力強化と連動する形で英作文の能力養成をめざした。本稿では、2005年度4年次の「英語」の授業の評価として課した自由英作文の課題と、同年度専攻科の「英語I」の授業で行った和文英訳指導の実践について報告し、これらの実践の果たした意義と、TOEIC・英検2級成績向上に向けての作文力養成の必要性について述べる。

2. 高学年・専攻科学生のTOEICテスト・英検2級の実績と問題点

2.1. TOEICテスト

TOEICテストに関しては、毎年3年次学生を対象に行っているTOEIC IPテストを、それ以降の学年の学生にも希望者を募って行っている。2004年度まで4度実施してきたTOEIC IPテストの高学年、専攻科学生の受験者は、この試験の重要性が認識されはじめるにつれて少しずつ増加してきた⁵。2004年度に実施したTOEIC IPテストの平均スコアをListeningとReadingにわけて示すと以下のとおりとなる。

表1

	Listening	Reading	差	Total
高学年, 専平均	191.8	131.8	60.0	323.6
400+平均	269.2	208.5	60.7	477.7
差	77.4	76.7	—	—
全体平均	178.8	115.3	63.5	294.1

第1行が高学年・専攻科の平均スコア、第2行がそのうちの400点以上取得者の平均スコアを示している。TOEICテスト400点以上というスコアは、多くの企業にとっての、初任者に対して要求する最低の英語運用能力の基準とされるスコアである。また、高専卒業後に様々な形で競合することになる大学生の平均スコアはほぼ420点程度である。これらのことから、「TOEICテスト400点以上」は、本校在籍学生が目標とすべきスコアとしては極めて妥当性が高いといえる。第3行で、400点以上の集団の、全体に対する優位性を平均点の点差で示し、参考として受験者全体の平均スコアを第4行に示す。

表1からは、どの母集団もReadingのスコアがListeningのスコアより低いことがわかる。つまり、学年が進行しても、また、高いスコアの集団をとっても、ReadingとListeningの能力の差がほとんど変わらず、Readingの能力は相対的に低いままである。これは、表1の第3列で明示されている。

菅原（2005）は、Listeningに重点をおいたプログラムの授業を実践し、その結果として、同様の授業展開を行わなかった他のクラスよりも効果的にTOEICテストのスコアを伸ばしたことを報告している。菅原（2005）のデータによると、あるクラス

⁴ 2001年度よりの本校の英語授業カリキュラムの変更については菅原（2005：56）を参照。

⁵ 高学年・専攻科学生の受験者数は、2001年度実施：9人（全164人中）、2002年度：31人（182人）、2003年度：59人（230人）、2004年度：82人（232人）。

(3年次)で1年間に平均して94点の伸びがあったうち、Listeningが56点、Readingが38点で、Listeningの伸びがより際立っている。Readingに関してはクラス間でそれほど有意な差ないので、やはりListening強化の授業展開は効果的であるといえる。

菅原(2005)の報告は、3年次つまり低学年に対する教育指導の論考であったので、これに連動する形で高学年・専攻科に対して考えるべきは、Reading強化であると思われる。

TOEICテストのReading Partは、次の3つのPartからなる。

- Part V 空所補充問題 (4択, 40問)
- Part VI 誤文訂正問題 (4択, 20問)
- Part VII 読解問題 (4択, 40問)

これらのPartのうち、Part VIIは長文読解を含む実質的な読解能力を必要とする。Part V, Part VIはReading Part全体の60%を占めるが、基本的には文法事項の理解力を必要とする問題である。TOEICテストにおいてReading Partのスコアを上げるためには、まずこれら2つの能力を強化することを考えなければならないということになる。

TOEICテストの結果通知には、各部門ごとの部分点は明示されて来ない。3年次あるいはそれ以降の英語授業においてTOEIC対策を行う場合、模擬試験などを通して各部門ごとのスコアの統計をとり、具体的にどのPartの形式に弱いのかなど、さらに詳細に特徴を明示して様々な問題点に対応していく必要がある。

2.2. 英検2級

英検の受験奨励は、本校の場合、級ごとにみると以下のとおりとなる。

- 3 級…1年次までに全員取得
- 準2級…2年次で受験対応の授業、全員取得を目標
3年次以降も未取得者には取得を要請
- 2 級…2年次以降取得を奨励
- 準1級…希望者の受験に対応

このうち、準2級の2年次における授業での問題演習の取り組みは、2001年度以降の本校での英語授業カリキュラム変更にもなって始まったことであり、3年次におけるTOEIC対策の授業、TOEIC IPテストの全員受験の準備も兼ねており、本校におけ

る英検の取り組みの中では、最も本質的な部分であるといえる。

他方、英検の各級ごとに必要とされる能力のレベルを本校の高学年・専攻科の学生に期待するとすれば、2級が妥当だと言えよう。鳥飼(2002:63)によれば、英検2級については、「高校卒業程度の英語力を要求しており、大学入試程度の文法力・作文力が必要とされる」ということになる。高等専門学校であることを考慮するなら、この目標は幾分低いように感じられるきらいもある。しかし、高専においては普通高校のカリキュラムに比して英語の授業数が少なく、また、通常の大学受験の機会がないため、高学年における英語力は同等年齢の大学・短大1, 2年生に比べると、一般的に言って格段に低いという現状がある(桑本・菅原・海上 2005:131)。これに加えて、高専卒業後に大学編入学を希望する学生が約半数を数え、一般企業への就職に関してもTOEICとならんで英検の必要性がなおも叫ばれている現在の状況のもとでは、やはり英検2級の取得は少なくとも本校卒業までに要望されることとして強調していいと思う。これまでも、TOEICテスト受験奨励や、低学年時の3級、準2級など他の級の受験、取得奨励の陰に隠されながらも、地道に英検2級受験奨励を行ってきた。

本校学生の英検受験状況は、2001年度の英語授業カリキュラム変更以来画期的に変化した。表2は、ここ6年間の英検2級受験者、合格者の推移である。

表2⁶

年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005
受験者	25	40	53	109	91	25
合格者	5	4	3	10	3	7
合格率(%)	20.0	10.0	5.7	9.8	3.3	28.0

※2005年度は第2回まで

カリキュラム変更の前後となる2000年度から2001年度にかけて、受験者はほぼ倍増した。その後も受験者は増え続け、ここ3年は約100名の受験者を保っている。合格者数、合格率は年度によりばらつきがあるが、これは受験者が増えたこととも関連している。つまり、2000年度以前は一部の英語の実力に自信のある者だけが受験していたのが、ここ数年は様々な社会的要請によって多くの学生が受験機会を増やしてきた結果であると考えられる。現時点では具体的な受験対策を講じないかぎり、安定した合格率向

⁶ 桑本・菅原・海上(2005)によるデータに基づき、一部改変したものである。

上をめざすのは容易なことではない。

高学年における英検対策は、現在のところ5年次選択科目「科学英語」で行っているのみであるが、ここで、高学年・専攻科学生の英検2級への取り組みについて、2004年度および2005年度における受験データを用いて考察してみる。

各回ごとの2級受験者、一次試験合格者、同合格率を、高学年・専攻科学生に限定してまとめると表3のようになる。

表3

年度一回	2004-1	2004-2	2004-3	2005-1	2005-2
受験者	6	29	23	3	11
合格者	2	1	3	1	3
合格率(%)	33.3	3.4	13.0	33.3	27.3

表2との比較において、高学年に限定すると、受験者が少ないせいもあり安定した数値とはなっていないながらも、回によっては30%を超えることもあり、学年が進行して英語力が増したと言っている。今後、様々な要因からさらに受験者が増え、それに伴い合格者、合格率も上昇することを期待したい。

表3の各回における設問の種類ごとの得点分布(平均点)は、表4のようになる。

表4

		文法・読解				リスニング		合計
		A	B	C	D	E	F	
2004 1回	平均	48.6	55.4	46.4	48.5	61.9	59.0	53.7
	合格	65.0	62.5	75.0	80.0	80.0	66.7	70.7
2004 2回	平均	45.2	36.2	44.8	44.8	48.5	46.2	45.1
	合格	65.0	62.5	66.7	80.0	80.0	66.7	69.3
2004 3回	平均	45.6	58.9	45.8	36.7	59.4	46.7	49.4
	合格	70.0	75.0	66.7	80.0	80.0	66.7	72.0
2005 1回	平均	66.7	58.3	58.3	40.0	55.6	48.9	56.9
	合格	70.0	75.5	66.7	60.0	73.3	73.3	70.7
2005 2回	平均	51.4	56.8	50.8	30.9	58.8	46.1	50.9
	合格	70.0	62.5	75.0	60.0	80.0	73.3	72.0

—凡例— A: 文法・語彙 D: 作文
 B: 空所補充 E: 会話文
 C: 内容把握 F: 一般文

各回の上段は本校の高学年・専攻科の受験者の平均得点率(%)で、下段は全国の合格者全体の平均得点率(%)である⁷。大まかに評価して、これらの値の差が大きいものほど本校高学年・専攻科学生

⁷ 英検2級に合格するためには、得点率にして60~65%が必要である。

にとって合格に足りない弱点の項目であると見なし、よと思われる。表4をつぶさに分析すると、D列、すなわち作文に関する項目で際だって差が大きいことに気づく。項目によっては全国合格者平均に近い値を示すものがある一方、D列の値は、60~80%が合格に必要なのに、本校高学年・専攻科学生はわずかに30~40%程度しか獲得できていない。これを見る限り、本校学生は作文の能力が他の能力に比して際だって低く、合格のためには作文力を向上させることが必至の課題であることがいえる。

3. 実践

3.0. 英作文指導の必要性

読解力の強化という点を十分に考慮し、筆者は2003年以来高学年・専攻科の英語授業を担当するにあたり、あえて英文長文読解を中心とした講読の授業を展開してきた。読解力向上のためには、何より文法の知識が必要になるが、文法知識に関しては、本校の低学年(1年次)において重点的に教授を行ってきている。学年が進行する中で、あらゆる場合において、この1年次習得済みの文法知識が基礎となっているはずであり、またそうでなければならないのだが、多くの学生にとってこのような文法知識を維持することは至難の技であり、多くの場合、重要な文法知識が欠落してしまっているという現状である。文法知識をさらに強化するために、また、文法知識を駆使することで自分の思考や意志を表現するという実用性を伴った訓練の場とするために、英作文指導を授業に導入することが効果的であると考えた。この英作文指導は、TOEIC・英検の受験指導に対する様々な問題点を解消する働きと、これらの検定試験のさらに高い成果を期待させることになることを確信している。

TOEICテストも英検も、その性質上、問題はすべて選択式の客観テストである。このような形式の問題だけに注目して演習指導を行っていたら、極論すれば正解を選択するだけの能力しか身につけられなくなり、自由な発想で文を構築し、自己の思考、表現をすることなど全くできなくなるだろう。それに加えてTOEICテストに関しては、本質的に英作文の構文能力を問う問題はないから、このことからしても、実際の英作文の演習指導することは十分な意味を持っている。

英検に関しては、2.2.節で述べたように、作文力をねらった問題がある。設問の数にして5問⁸で、5

⁸ 英検2級の場合、一次試験の問題数は75問である。

つの単語、または、名詞句、動詞句、前置詞句などの断片が羅列されており、それらを正しい順序に並べた末、2番目と4番目をマークするという形式である。マークシート方式では、このあたりが限界なのかも知れないが、実際の自由英作文や和文英訳問題とはそのあり方にかなりの相違がある。たとえば、構文の組み立てがおおむね理解されていても、ただ1カ所副詞の位置がずれていただけでも順序が変わり、不正解として扱われる。また、選択肢を選ぶだけの作業では単語のスペリングを実際になかなか覚えられないという弊害もある。

これらの問題点は、英作文演習を行うことでほぼ解消され、加えて自分の考えを正確に表現できるという実用的な言語使用の機会を提供するものでもある。また、このような英作文演習を通して、正確な文法把握を促し、TOEICのPart V, Part VIの文法問題や、英検の作文問題も含んだ文法理解の問題を的確に理解できる能力を養うことができるものと期待できる。

筆者は、2005年度開講の4年次「英語」において単位認定のための課題レポートとして自由英作文を課し、添削指導を行った。また、同年度開講の専攻科「英語I」において予定授業のおよそ半分を和文英訳演習指導にあて、実践した。次の2つの節でそれらに関する実践を報告する。

3.1. 4年「英語」における自由英作文の実践

筆者は、2005年度に4年次対象の「英語」を担当した⁹。この授業は通年週2時間(90分)2単位の必修科目である。担当したのは機械工学科(4M)、電気工学科(4E)の2クラスである。授業の内容は、高学年における英語読解能力の強化をねらい、講読中心で行った。この授業の単位認定のための評価は読解演習による内容に関わる4度の定期試験を中心に行うが、前期の評価に関しては、自由英作文の課題レポートの評価を加味することとした。

自由英作文の宿題は、夏休みの期間を利用するのが有効と考え、夏休み直前の授業に課題提出の予告を行った。学生にとっては、これまでの英語授業で本来的な英作文などほとんど行ったことがなく、とまどいが予想されたので、作文のテーマについていくつかの例を紹介した。

自由英作文のテーマの例

- ・夏休みの思い出
- ・出身地(国・地域・都市)の紹介

⁹ 本稿提出時継続中の授業である。

- ・将来の夢
- ・機械工学科/電気工学科と自分

テーマを何にしようか迷っている学生には、課題が出されている長い夏休み中にする様々な経験について説明したり、県内様々な地域から集まってきているクラスメートに対して自分の出身地域を紹介したりということなら取り組みやすいはずである。また、翌年卒業を控えている学年の学生として、将来を見据え、あるいは、ここまで学校で学んできた工学分野についてある種の主張をするということは実に意義深い経験となる。このような様々な動機づけを持たせて、テーマの例示を行った。もちろんあくまでもテーマは自由であり、常識の枠を超えさえしなければどんな内容でもよく、重要なことは論旨をしっかりと展開させることであることを強調した。

課題レポートの提出は夏休み明け1回めの授業に行った。提出のあった課題レポートのテーマを分類すると表5のようになった。

表5

	4M	4E	合計
インターンシップ	11	3	14
将来・自分	10	13	23
社会問題	1	1	2
出身地・町の紹介	4	12	16
夏の旅行・レジャー	5	6	11
趣味・性格	6	7	13
その他	0	2	2
計	37	44	81

最も意外でかつ特徴的だったのが「インターンシップ」に関するものが多かったことである。本校では、4年次学生に対して、例年夏休みの期間を利用して企業・工場などで実習を行う「インターンシップ」を奨励している。夏休み中にインターンシップを利用して工場実習の経験をした学生が多数いて、将来の職業をかいま見るといふ貴重な経験とともに仕事の責任、厳しさにふれ、将来について、自分自身についてしっかりと考える機会となったようで、そのような内容についてしっかりとした意見が書かれていた。

選ばれたテーマの中で最も多かったのが「将来・自分」についてである。将来に対する不安やこれまでの自分を見つめ直すといった内容が多く、やはり意外にも自己を真剣に考える時期にきていることを痛感させられた。

「出身地・町の紹介」「夏の旅行・レジャー」の分類もかなり多かった。ここの分類のものは内容は深刻ではなく、軽妙に論が展開していたが、しっかりと論理立てて観光案内などがなされているものもあった。

「趣味・性格」の分類のものは、自分の好みをいかに他人にアピールできるかということが重要であり、書き手の、内容を何とかわかるように伝えたいという思いが、おそらくかなり強く出されていたようで、全体としてまとまりのあるものもいくつかあった。

論旨がしっかりしていたものとして「社会問題」に分類した2件が特筆される。これは、地球温暖化に言及し、太陽光発電によるソーラーカーや燃料電池自動車の普及の可能性について論じたものと、郵政民営化にまつわる諸問題を扱ったものである。自分の専門分野と社会問題を関連させたり、現代社会における最も注目されている項目を取り上げたりと、内容的に非常に意味のあるものだったと思われる。このようなテーマのものがもっと多くあればよかったと思う。

英語による自由作文は、受講学生のほとんどにとって初めての経験であつたらしく、かなり稚拙なものが多く見られた。しかしながら、英文の正確さはさておき、何とか自分の主張を伝えようとする姿勢が感じられるものもあり、さらに構文や文体上ほぼ問題ないというものもあった。このように英文作成の能力が様々である学生たちに対して手の行き届いた指導をするためには、このような作文指導を課題レポートという一回性の評価ではなく、継続的にかつ時間を使って取り組んでいく必要があると感じた。

3.2. 専攻科「英語 I」における和文英訳問題演習の実践

筆者は、2003年度より専攻科の「英語 I」を担当している。「英語 I」は、専攻科1年次の必修科目で週4時間(90分×2回)の前期開講科目である。2003年度、2004年度は講読中心の授業を行ってきたが、2005年度は、講読の授業に加えて和文英訳の演習を盛り込むことにした。

専攻科の学生は、本科よりもさらに高度な研究活動を行うことになり、研究のためには英語で書かれた論文に当たり、場合によっては英文の論文を発表しなければならない。このような状況に順応していくためにも特に英語の作文力が要求される。ところが、専攻科に進学してくる学生の英語力はそのような要望に応えられるだけ十分に備わっているとは言

い難い。特に英作文の経験が皆無に等しいことから、作文力が備わっていない。そして、作文の経験がないことにより、文法知識の維持もかなり危ういといった状況である。これは、2節でふれたように、TOEICテスト・英検の高学年・専攻科学生の結果データからも明らかにされたことである。以上の状況の中で、和文英訳の問題演習を実践した。

用いたテキストは日栄社『和文英訳225選』である。これは、過去の大学入試から和文英訳の問題を抜粋したもので、数十字程度の和文が225問で成り立っている。それぞれの問題には、難解なものに対してはヒントや注釈が施されている。一般には難関大学入試のための受験対策で用いられているものである。

受講学生には英作文の経験がほとんどないことがわかっていたので、1回めの授業で行ったガイダンスで、和英辞典を購入することを指示し、数種類の標準的な和英中辞典を推薦した。

授業の進め方は、1回の授業で10数問程度を扱うこととし、あらかじめ受講者全員に和文英訳問題の準備をしてきてもらってその場で割り当てを決め、黒板にその内容を板書させた。受講者は当該年度1年次在籍者全員となる18名であり、1回の授業で全員に1問ずつ割り当てるのをノルマに決めた。そして、板書された英文を添削し、間違いを直したり、注目すべき点を強調したりしながら、英作文のテクニクとなる手法を指摘した。

このような方法による授業を講読の授業と平行で行い、全部で14回の授業を行った。扱った問題は180問となった。授業全体に対する英作文の部分の評価は、授業中に行った自分の担当箇所を、授業での指摘やその後の再考をもとに書き直し、レポートにまとめるというものである。このレポートによる評価は授業の全評価のうちの30%とした。

この授業の実践を終えて気づいたことは、やはり学生の作文力の未熟さである。4年次学生に対して行った自由英作文に比べると、翻訳する和文が決まっているのでその点容易に取り組めるはずである。経験がなかったという点は差し引いても、半年の授業展開の中で、もう少し能力向上の萌芽が見えてもよかったかと思われた。このような和文英訳の拙さを挽回させられなかった根本原因は文法力のなさであると思われる。本科低学年時の基礎を固める時期に手を抜いたり、その後の学習課程の中で反復して文法事項を確認する機会を持つ習慣を身につけてこなかった「つけ」が、専攻科になってなかなか英語力を伸ばすことができない理由の一つとなってしまっ

ている。和文英訳の演習を今後も継続的に行って、読解を含めた書写言語としての実用的運用能力を養うことが、専攻科における英語教育に不可欠な要素であると結論づけることができよう。そして、その先に TOEIC テストおよび英検での高得点獲得・合格が期待できるのである。

4. おわりに

以上、2005年度に行った高学年・専攻科学生に対する2つの英作文指導の授業の実践を報告し、その問題点と、展望について述べてきた。これら2つの実践を通して痛感したことは、作文力、文法力のさらなる強化の必要性である。

近年、英語教育の現場では、実用的なコミュニケーション能力の向上が要請され、様々な試みがなされてきたが、主に強調されているのは音声によるコミュニケーションであるといえる。つまり、Listening力の強化を中心にし、最終的には英語によるスピーチや全て英語を介しての授業展開などが求められている。この一方で、書かれた媒体を介してのコミュニケーションも同時に重要な要素と考えられる。3.2.節で触れたが、専攻科学生にとっては英語で書かれた論文をいかに読みこなすのかということが研究活動の重要な要因となる。そのためには英語を書く能力もきわめて重要な実用的技能ということになる。音声言語としての「聞く」「話す」能力と、書写言語としての「読む」「書く」能力は車の両輪のような関係になっているべきで、近年の音声言語教育への偏重の風潮の中で、書写言語の、特に「書く」という能動的なコミュニケーション能力の向上へ向けてももう少し注意を払う必要があると思う。「書く」ことの練習によって身に付いた文法事項やそれ

らに基づく表現は、ひいては論理的な思考活動や発話の際の基礎的知識としてオーラルコミュニケーションの現場にも貢献できる可能性をもつのである。実用的な英語力、特に自由に話せたりすることを中心に身につけるためには、まず書かれたものをたくさん読むこと、それによって語彙を増やし、様々な表現を自分のものにしておくことが何より必要であることが、言語学(鈴木 1999)、英語教育学(山田 2005)などの立場からも主張されている。

このように総合的に英語力を高めていくことができれば、TOEIC テスト・英検などの得点向上は当然期待できるということになる。

本稿は、部分的に平成17年度秋田高専創造教育支援経費(プロジェクト名「プレゼンテーション能力の向上を目指す英語教育」(整理番号14))の助成を受けている。

参考文献

- 桑本裕二・菅原隆行・海上順代「実用英語技能検定試験受験者の推移と現状—秋田高専における実践より—」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第40号, 128-134, (2005)
- 菅原隆行「低学年における英語の基礎力と TOEIC の成績の関連性」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第24号, 55-63, (2005)
- 鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書, (1999)
- 鳥飼玖美子『TOEFL・TOEIC と日本人の英語力』講談社現代新書, (2002)
- 山田雄一郎『英語教育はなぜ間違っているのか』ちくま新書, (2005)